とっとこハムスケ

木綿絹ごし

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はむはー！
のんたる書いたから、みんなものんたるキョロリンしてね
おもろぷぅだと思ったらはなマルっちをクレレッ！
うにに～な内容かもだけどちゃいっ

目次

前半――1
後半――20

前半

「むにゃ……もう食べられないでござるよお」
とある森の奥深く。洞穴ですやすやと眠る一匹の魔獣……いや、この世界に於いては大魔獣に分類されるだろう。一匹の大魔獣は寝言を漏らしていた。
小鳥やリスなどの小動物を除けば、この森には大魔獣しか住んでいない。人の足が踏み入れない自然豊かなこの場所には、木の実や果物などの自然の恵みが手付かずで残っている。
代謝の早い種族ではあるが、縄張り内ですら東京ドームより広大なこの森が更地になるほど食べられるはずも無く、熟した順に食べるだけで腹いっぱいになるのだ。
この大魔獣が棲みついたのは今は昔、この大地を絶望の淵に追い込んだ〝魔神〟と呼ばれる者達が暴れまわった頃とも、それより昔とも言われている。
尤も、この大森林には魔樹の竜王が封印されていたため魔神ですら近寄らなかったのだが、それを伝える書物が正しく保存されていなかった故に後世に伝わっていないのだ。

◆

「おい！　薬草の採取はまだ終わらないのか!!」

彼は……否、彼らは冒険者チームとして薬草の採取に来ていた。中堅クラスの実力を保有している物の、冒険者の仕事とは護衛任務かモンスター退治、後はカッツェ平野のアンデッド討伐とエ・ランテル共同墓地の見回り程度だ。

こうして書くと多忙に思えるが、数ある冒険者が日々仕事を取り合っている。難度の高い仕事であればリスクの代わりにリターンも大きいが、彼らにはまだ実力が足りていない。

ポーションは劣化する。保存の魔法は存在するものの、劣化を防ぐまでには至らない。

薬効の高い物ほど高価で取引されるが、当然ながら需用の高さから採れる場所は限られてしまう。

もしもモンスター退治による報酬が受けられるなら良かったのだが、「国に住むものが己の脅威を排除することは民の義務であれ責務である」と貴族達は考えており、緊急性を要する事案以外は無償の任務である。

通常であれば誰も受けたがらないのだが、誰かがやらなければ道中の護衛任務がより

危険性を増すことから、経験を付ける目的も兼ねて子鬼（ゴブリン）などの低級なモンスターを中心に討伐している。中位から上位の冒険者と連れ添っての狩りではあるが、決して死亡率が低いとは言えない危険な作業だ。

　閑話休題として、受ける仕事が無い時はどうするのか。そう、森へ出向き薬草を探すのだ。木々に遮られ日中ですら薄暗く、視線も通らない危険な場所ではあるが、危険だからこそ見返りも大きい。

「ちょ……ちょっと、声が大きいわよ。もう少し声を抑えてちょうだい」

「この辺りで子鬼（ゴブリン）や人食い大鬼（オーガ）を見たか？　きっと縄張りの圏外なんだよ」

「それでも可能性はゼロじゃない。他の魔獣だって居るかもだから、兄貴は常に警戒すべきよ」

　腰に剣を佩く男に急かされる彼女は、チームの中で唯一薬草の知識に長けている。野草や茸というのは、似ていても全く効果が違うことが多い。毒を含んだり、同じ袋に入れると毒性を孕む場合もある。気が抜けない作業であるため慎重に、かつ手早く行う必要がある。

　なのに剣士のほうが急かすのは、モンスターと遭遇しないことが原因だ。最初の時分は気を張っていたが、こうも暇では逆に不安になってしまう。

「何度も来てる森だろ？　そんなに精神を張り詰めずにリラックスしたらどうだ」

彼自身、静かすぎる森に違和感を覚え一抹の不安を抱いているが、森の入口付近なら来たことがある。

あの時は子鬼(ゴブリン)や人食い大鬼(オーガ)が住んでいたが、最近はころっと見かけない。冒険者達が腕を磨きすぎて生息域が縮小したのだろう。

自分だけが気を緩めては他の仲間に示しがつかない。彼女を巻き込むことで、もし怒られた場合の保険としているのだ。男という生き物は女性には甘く出来ている。それを利用するのだ。

「で、でも……今日は少し深いとこまで潜ってるから、少しでも早く終わらせたいの。兄貴もちゃんと警戒しててよね」

「ふん、俺は盗賊の索敵スキルを持たないからな。あいつが見落とす程の隠密系なら接近されるまで気づけないだろうよ」

離れた場所で監視する仲間へ視線を向けつつ、俺が気づけないならお前も気づけない(兄より優れた妹など居ない)と言外に含めている。

嫌味ではなく「気づけないなら警戒する意味なくね？」程度の意味しか持たない。視界に入れば剣を抜く。それだけの話だ。

「なら攻撃される前に対処して。——よし、この辺りの珍しい薬草は回収できたし、盗賊の人に撤退を伝えてちょうだい」

「まだ残ってるじゃないか。それに中途半端に摘み取ってるのもあるし……全部採らないのか？」

食べ残しの様に一角だけ残されていたり、根っこまで抜かず茎から上を摘んでいる薬草もあった。

「ほんとに……兄貴は何度言っても覚えないのね。全部採っちゃったらもう生えてこなくなるの。何事も適度が大事なのよ」

「あー、そんなこと言ってたな。まあいいや、盗賊の奴を呼んでくるよ」

彼が動くよりも先に盗賊の男性が戻ってきた。脇芽も振らず血相を変えて走っている姿に気づき、目つきを鋭くする。

「ハア……ハア……た、大変だ！　にげ――」

「き……きゃあああああああ‼」

鞘に手を伸ばすよりも先に事態は急変した。

近づいてきたはずの男性が視線から外れたのだ。轟音と共に大木に打ち付けられ、動く様子を見せない。

いきなりの出来事に、思わず彼女は叫んでしまった。己の居場所を知らせる悪手だ。敵の姿が確認できない以上、退路を絶たれてしまった。

「お前は下がってろ！　支援頼むぞ‼」

「ま、任せて！」

前衛の彼が前に出ると、彼女は短杖を取り出した。薬草などの知識に長けると共に、第二位階までを修める魔法使い（マジックキャスター）なのだ。

「《下位属性防御（レッサー・プロテクションエナジー）》《下級筋力増大（レッサー・ストレングス）》」

剣士の身体を包み込むように魔力が纏い、肉体は脈打つように唸りを上げている。

草が擦れる音を感じ取り、すぐさま音のする方角へと剣を向ける。

「……」

一向に敵の姿が確認できないことに苛立ちを覚えつつ、焦れる気持ちを強引に抑え込む。敵が分からない以上、こちらから動くのは愚策でしかない。

「!?」

突然目の前に現れた何かに反応するよりも早く、その何かは剣士を吹き飛ばし、後衛の魔法使い（マジックキャスター）が視認出来ないまま、追撃する様に地面へと叩きつけられた。

「兄貴!?　だ、だいじょ――」

大丈夫な訳がない。運が良くても致命傷だ。

反射的に口にした言葉を言い切るよりも先に、その何かによって彼女も絶命した。

一瞬の出来事だった。その何か……いや、何かの持ち主は鼻をピクピクと動かしながら近づいてきた。

「ふむ……某の縄張りへ侵襲した愚かな者達は、その命を罪として散らしたでござるか」
理由があるかと言われたら困るが、この生き物は自身の縄張りへの侵入者を撃退にし来たようだ。
「んう……うぅ……」
「むむ!? まだ生きていたでござるか!」
生きていたでござるよ。第一声で吹き飛ばされた盗賊の彼が気絶から目が覚めたのだ。
死の気配が未だ遠ざからない中、声を発してしまったのは経験の浅さが原因だろう。そもそも経験豊富であれば森の奥など立ち入るはずも無いのだが、それはこの際置いておこう。
「なんと……言葉を交わす大魔獣とは……叡智を感じさせる力強い眼光、それに屈強で恐ろしくも気高き……そう、森の賢王と呼ぶに相応しい超越した生命体」
「ふむ?」
首を傾げる大魔獣。それもそのはず、先程まで一方的な殺し合いをしていた者が自分を褒め称えたのだ。驚くのも無理はない。
その褒め称えた盗賊の彼はと言うと、完全に諦めきっており、現実逃避をしていたのだ。

「貴殿……某がそれ程までに凄いと思うでござるか？」
「え？　あ、はい。私がこれまで出会ってきたどの魔獣をも圧倒します」
独り言のつもりで呟いていたが、思いもよらぬ返答に生への光が灯された気がした。
「ううむ……某の縄張りへの侵入は許しがたい行い。貴殿らが摘み取った森の一部を放棄するのであればその命、見逃すのもやむなしでござるよ」
「感謝の……感謝の言葉もありません」
藁にもすがる気持ちで追伸して褒め称えたことが幸を期したようだ。盗賊の彼はすぐ様……と言っても薬草を詰んでいたのは彼ではないが、置き捨てられていた革袋を森の賢王なる大魔獣に差し出すと、仲間たちを一瞥することなく逃げていった。
もしこの森を支配したのが大魔獣ではなくゴリラであったら、こうはいかなかっただろう。言葉を介する大魔獣とは違い、ゴリラはウホウホ鳴くことしかできない。
サルであればウキウキ鳴き、夏であれば雨期を、嬉しいときにはうきうき気分を伝えることが可能だがゴリラは違う。
ウホウホ鳴こうが呻こうが、それはウホウホでありウホウホに過ぎないのだ。決して言葉ではなく、人間と意思疎通を交わすことなどとんでもない話だ。
かつて人間に似ている。それだけの理由で殺されたことのあるゴリラ。人間に対して生殺与奪の権利を握る絶対的強者である大魔獣――後の森の賢王とはえらい違いで

ある。

◆

街に戻った盗賊の彼は、冷静になって考えてみると仲間を見捨てて逃げ帰ったと思われるのではないかと危惧を抱いた。
気絶している間に仲間達が命を散らしたとは言え、それを信用する者など誰も居ない。かの大魔獣――森の賢王の偉大さ、そして自分を見逃した寛大さを伝えることで誤魔化すこととした。
その素晴らしさを見聞する役割として、自分は生かされたのだ。逆に言えば、森の賢王の存在が周知されたことでむやみに人間が立ち入ることを防ぐ役割も兼ねている。
それはもう盛大に、過大に。雄弁とまでは言い難いが、その熱意は冒険者を通して人々へと伝承されるまでに至った。

◆

「ガリアン……」

自然を愛する男。とあるゲームでは——と名乗る彼は、空になった籠を見て何度目かの嘆息を吐いていた。
日夜問わず滑車を回る音が聞こえていたが、今の部屋では空気清浄機の駆動音しか聞こえてこない。
「毎月の餌代がバカにならなかったけど、いざ居なくなってみると空虚な思いになるんだね」
亡くなったジャンガリアンハムスター——ガリアンのことを想いながら、その胸の思いを吐き出すように口にした。
この世界に置いて人間以外の動物は非情に少ない。
当然と言えば当然だが、外の世界では生きることが出来ず、家畜や愛玩向けとして養殖されている一部の動物しか存在しない。
知らない人であれば「また同じ動物を飼えばいい」と思うかもしれないが、それは見た目が同じに過ぎない。
人間に例えると分かりやすいだろう。同じ人間でも性格や考え方が全く違う。同じ血を分かち合った兄弟ですら、その性格は異なるのだ。
もう二度と、ガリアンは戻ってこない。
滑車を眺めながら彼は思った。空回りしていても仕方がない。人は前へ向かって歩

き続けなければならない。歩いた気持ちになるのはハムスターだけで十分だ。

余談ではあるが、ハムスターが滑車を回る理由。ハムスターは遠くまで餌を探し走り回る習性を持っている。散歩させないと犬がストレスを抱えてしまうのと同じで、ハムスターも遠くまで走る必要がある。

その代用として滑車を走るのだ。それで遠征した気持ちになれるのだから、ハムスターの知性がどれだけ浅いのかが良くわかっただろう。

そんなハムスターでさえ、飼い主に頼まれれば買い物に出かけ家事をもこなす。バナナを食べてうんこを投げるだけのゴリラとはえらい違いだ。

さらに余談だが、かの有名な〝ひまわりの種〟。あれは種ではなく実である。だが皮を剥いた中身。つまり種を食べているので〝大好きなのはひまわりの種〟で間違っては居ないのだ。

「落ち込んでいても仕方がない、か……」

彼は立ち上がった。ガリアンを過去にしないように。その想い出を残すべくユグドラシルのコンソールアプリを立ち上げたのだ。

ギルド拠点地に配置するＮＰＣの合計レベルは決まっているが、個人的にＮＰＣを作ること自体は可能だ。

生命とは神秘。宇宙そのものだ。動物と接することで愛が芽生えた彼だからこそ、こ

の発想に至ったのかも知れない。

願うことなら、ナザリック地下大墳墓が第六階層の下で元気に動いて欲しい。これは願望ではなく願いだ。彼自身、到底不可能だと分かっている。分かっては居るのだが、それでももう一度、元気に駆け回る姿を想像してしまう。最も、籠の中では駆け回ることは出来なかったのだが。

このモデルは他人に見せる訳ではない。気持ちを整理するための作業。それ故に同じギルドの仲間達も、その存在を知ることなくゲームは終焉の時を迎えた。

◆

「ここは何処でござるか？」

鼻をひくひくとさせながら、辺りを見渡す一匹の魔獣。巨大なジャンガリアンハムスターがそこに居た。

ジャンガリアンな時点で既に大きいのだが、ひと回りどころか百回りも千回りも大きい超巨大なハムスター。並んでいると逆に自分が小さくなったのかと、思わず錯覚してしまう。

ユグドラシルでは存在しなかった種族。実際にゲームの中でこの魔獣が動いたこと

は無かったが、その設定として書かれた一文に引き寄せられ、新たな種族が芽生えたのだ。

『NPCのデータとしては――１ｖ。その余っているレベルはジャンガリアンハムスターとしての種族レベルとして扱う』

有り得ないことではあるが、それを言ってはこの世界そのものを否定してしまう。不思議なこともあるんだなぁ。その程度に留めておいて欲しい。

「某の物語の幕開けでござるよ！」

大魔獣は耳を器用に動かし、周囲の音を拾っている。

「いくつか足音が聞こえるでござるなぁ」

当然と言えばそれまでだが、この森――人間からはトブの大森林と呼ばれている――にはモンスターが生息している。

新たな種族が住むには、先住民と共存するか追い出すしかない。これは餌となる食べ物が限られていることに起因する。

食べられる餌が増えない以上、そこで暮らしていける生物も増えることはない。

ならば新参者である大魔獣が取るべき行動は一つ。

「オマエ、ナニヤツ」

「うーむ？　某は気がついたらここに居たが故によくわからないでござるよ」

吾輩はハムである。名前はまだ無い。いやハムスターなこと自体本人は知らないのだが、文字通り物心着いた頃からここに居るのだ。何と言われても知るはずがない。

話しかけてきた相手はと言うと、大柄なヒト型の肉体にこん棒を持っている。人食い大鬼（オーガ）だ。

「ギサマノ、トコロへ、イク。トリアエズ、ツイテコイ」

「うーん、少し五月蠅いでござるよ！」

大魔獣は軽く尻尾を振り回した。誕生したばかり、つまり寝起きなのだ。寝起きでやかましく言われれば怒るのも仕方なかろう。

鎖のように硬質な尻尾が直撃した人食い大鬼（オーガ）は身体が真っ二つになり、青い血を辺りに撒き散らしている。

あくまでも軽く、のつもりであったがレベル差が違いすぎる。力加減を失敗した大魔獣であったが、対応を間違えたのは人食い大鬼（オーガ）も同じ。手打ちのつもりが尻尾打ちとなったのは想定外であったが。

「それにしても非常に良い森でござる！」

自然を愛する男の残滓に影響されたのだろうか。葉と葉の擦れる音。鬱蒼と生い茂る草木の青臭さ。鳥や虫たちの鳴き声。

そのどれもが新鮮で、大魔獣を興奮させた。

「ここを某のお家にするでござるよ！」
お家宣言は大事、何処かの饅頭もそう言っていた。
なんにせよ、ここを縄張りと決めたのなら宣言は悪い手ではない。文句があれば立ち向かうしか無いし、嫌なら逃げるしか無い。
大魔獣が大声で宣言を上げたことで、他の住民は知らぬふりをする訳にはいかない。仮に人食い大鬼（オーガ）が見逃したとしても、大魔獣の方が見逃さない。
これがゴリラであれば共存の芽もあっただろう。ゴリラは意外と優しいのだ。ウホウホ言うだけで話の分からない奴ではあるが、その瞳は温かさに包まれている。
「むむ！　また某の縄張りに侵入者でござる！」
某が来る前から居たでござるよ。そんなことは言わずもがなであるが、大魔獣には関係のないことだ。
「コノ森の一角ヲ支配スルギダ！　決闘ヲ申シ込ム！」
「命の奪い合いをするでござる！」
仲間を殺すだけでは飽き足らず、この大魔獣は縄張りを奪いに来たのだ。トブの大森林三大戦力が一人、ギは灼熱のような怒りに身を振るわせている。
「死ネエエエエエイ!!!」
丸太のように巨大なこん棒を両手で抱えたギが大魔獣めがけて接近する。

　こん棒の攻撃範囲を熟知しているギは、殺意を籠めて振り翳した。フェイントのない力任せな一撃だ。

「見切った！　でござる!!」

　伸縮自在な尻尾で器用にこん棒を受け流し、大魔獣から反れた攻撃は地面に大穴を残した。

「フンッ！」

　大地を抉り取るようにこん棒をすくい上げ、持ち上げる勢いで大魔獣めがけて狙い打つ。

「なんのこれしきでござる！」

　土を蹴り上げ攻撃を躱す。その巨大な肉体が飛び跳ねる様は、さながら撃ち出される大砲の如き重低音を響かせる。

「盲目化（ブラインドネス）！」

「グハァ！　目ガァ、目ガァアアアアア！」

　突然奪われた視界にたたらを踏んだギは、倒れるように尻もちを着いてしまった。

「今でござる！」

　槍のように鋭い尻尾を突き立てるようにギの胸へ向かって繰り出した。

「ギハァ！」

見えない攻撃故に避けることも叶わず、ギは生命活動を停止。死んだのだ。

「某の勝利でござる！」

ギの周囲を走り欣喜雀躍（きんきじゃくやく）する大魔獣。仲間だった人食い大鬼（オーガ）、それに子鬼（ゴブリン）も住んで居たが、遠くから勝負の行方を見守っていた彼らは諦めた面持ちで森を後にした。

それからと言うものの、大魔獣は掃除をするように侵入者を退治していった。

一匹の大魔獣から『森の賢王』となり、『ハムスケ』と呼ばれるのは遠い未来のお話。

◆

「行くでござるよ！」

「オオオアアアアアアアアーーー!!」

ハムスケに騎乗した死の騎士（デス・ナイト）は、タワーシールドを持たずにフランベルジュを持っている。

理由はと聞かれると、単純に重すぎるから装備していないだけだ。ハムスケ専用の防具を身に纏っているため、まだバランス感覚が安定しない。殿を乗せても恥ずかしくないようにと、一歩づつ着実に練習を進めている。

ここはカッツェ平野。霧からアンデッドが生まれ続け、いくら倒しても滅ぶことのな

い死んだ大地として有名だ。
　とどまることを知らないアンデッド。現地の人間からすれば地獄のような場所も、ハムスケと死の騎士（デス・ナイト）にとっては天国でしかない。アンデッドは死んでいる。だから天国――ではなく、このコンビなら負けないという信頼関係がレベルングの地を築き上げたのだ。
　最早敵無しではあるが、カッツェ平野には死の騎士（デス・ナイト）が湧いた記録がある。死の騎士（デス・ナイト）が最も強いアンデッドなのか、それ以上のアンデッドが生まれるのかは誰にも分からない。ハムスケは当然ながら、丸くなった死の騎士（デス・ナイト）も貴重だ。離れた場所では高レベルのモンスターが彼らを見守っている。
　何時もと変わらない日常。ハムスケは見慣れたアンデッドを潜り抜け、そこに死の騎士（デス・ナイト）がフランベで斬り付ける。これでハムスケに経験値が入るのだから、楽な作業だ。
　刺突武器への耐性が高いアンデッドとは言え、剣で真っ二つにされれば積みだ。動けなくはないが、体力が無くなれば偽りの生命も失われてしまう。
「オオオァァアアアアアアアーーー!!」
「ん？　どうかしたでござるか？」
　何かを発見した死の騎士（デス・ナイト）に連れられるようにハムスケは視線を動かした。

　塔……いや、塔だった物だ。既に朽ち果て、瓦礫に埋もれている。ここがアンデッド蔓延る大地で無ければ身を潜める者も居ただろう。だがアンデッドに囲まれれば命の危険すら覚えるこの場所で逃げずに隠れるバカなど居るはずもない。

「うーむ、気配は無いでござるが……」

「オオオァァァァァァァァァァーーー!!」

「何かあったら某が守るでござるか？　かたじけないでござる！」

　死の騎士（デス・ナイト）に背中を預けたハムスケが、崩れていない入り口から顔を覗かせる。

　――システム認証。ＮＰＣ。ゲート展開。

「うわ!?　な、何事でござるか!!?　と、殿ーーーー!!!」

「オオオァァァァァァァァーーー!!」

　ハムスケと死の騎士（デス・ナイト）の声は虚しく、霧とともに掻き消えていった。

後半

「ハムスケと死の騎士(デス・ナイト)が消えただと？」
　申し訳なさそうに俯くアンデッドたち。遠くから二人を見守っていたにも関わらず、護衛対象を見失ったのだ。頭を擦りつけ、今にも死んでしまいたい気持ちだろう。
「《伝言(メッセージ)》──駄目だ。繋がらないな」
　アインズは顎に手を当て考え込む。自らが召喚した死の騎士(デス・ナイト)との繋がりは消えていないものの、それはハムスケが無事である証明には繋がらない。
　これがナザリックに仕えるＮＰＣであればコンソールから確認が出来るが、現地勢のハムスケは表示されない。同じアインズ・ウール・ゴウンの傘下ではあるが、ナザリックの上限レベルを分かち合った仲ではない。ナザリックで行方不明になった時もそうだが、有事の際に生存確認が出来ないことは大きな問題へと繋がりかねない。
「本格的な捜索部隊を出すのは様子見として、お前たちは連絡があるまではカッツェ平野でハムスケ及び死の騎士(デス・ナイト)の捜索だ。三人グループで行動し、有事の際は情報を持ち帰ることを優先せよ」
「畏まりました」

アンデッドたちは部屋を後にし、再び静寂が部屋を支配した。
（はぁー、あの時ジャンガリアンハムスターを失った彼が味わったペットロスって、こんな感じなのかな）
アインズは脳裏に第六階層を元気に駆け回るハムスケを空想した。

◆

「み、見るでござるよ！　ここは天国でござろうか……」
「オオオァァァアアアアアアアー ーー‼」
目の前の光景に思わず喚声を漏らしてしまった。
大きなお城を中心とし、様々な施設が点在している。リスやハムスター、ムササビなどの小動物たちはワイワイガヤガヤと、まるでお祭り騒ぎのようだ。
「ようこそー！　夢の国ハムハムランドへ‼」
二足歩行で白黒のハムスターー――ネズミでは無い――が入口付近から二人に声を投げかける。
「お二人さんは初見の方ですねー、まあ善なる者しか入れないはずですから、まあ問題ないかな。ハハッ」

名ばかり賢王ことハムスケは確かにカルマ値が善――正しくは中立――であるが、死の騎士（デス・ナイト）は極悪だ。

尤も、丸まった死の騎士（デス・ナイト）を見て悪だと思う人――ハムスターだが――も少ないだろう。カルマ値は人間基準に付けられている。ハムスケと仲の良い死の騎士（デス・ナイト）。きっとハムスター基準のカルマ値は極善だろう。

「ここでは毎日が休日。定休日ですー！　楽しんで行って下さいねー」

白黒のハムスターに連れられ「お二人さんご入場ー」の声と共に、謎の入り口へと足を踏み入れた。

「オオオアアアアアアアアーーー‼（私はハムスターから降下します）」

「んー、確かにその方が良いでござろうな」

フランベルジュを鞘に収めた――どうやって入れたかを聞いてはいけない――死の騎士（デス・ナイト）はハムスケから降り、仲良く連れ添うことにした。

園内を歩く者たち。彼らは小動物にしては大きい気もしなくはないが、自分たちのほうがひと回り大きいことには変わりない。

警戒されないために降りることは間違いではない。四つん這いの人間に騎乗した魔獣が人里へ降り立てば警戒されるが、手を取り仲良く接していれば警戒心も薄れてしまう。丸くなった死の騎士（デス・ナイト）を見れば自然と剣呑な空気も丸く収まるものだ。

二人は見たこともないが、園内はさながら遊園地のような――いや、遊園地が広がっている。

回転する木馬や茶碗。空飛ぶドラゴンに巨大な円を描く小箱。左右に揺れる方舟や謎の施設が展開されていた。小動物たちが楽しそうに利用しており、見知らぬ物体に二人は好奇心を刺激されずには居られなかった。

「オオオァァァアアアアアアーーー!!」

「うむ！　どれも楽しそうでござる！」

「オオオァァァアアアアアアーーー!!」

「楽しさが沈静化されたでござるか？　アンデッドとは辛辣でござるなぁ」

両手を上げ全身で喜んでいた死の騎士(デス・ナイト)であったが、気持ちが落ち込み両手をぶらぶらと下げている。

ころころと気持ちを変化させる死の騎士(デス・ナイト)に、周囲の小動物たちは警戒心を溶かしていき、今は気にせず遊園地を楽しんでいる。

心まで丸くなったアンデッドなど何処に居ようか。まさかここに唯一の個体が居るとは誰も思わないだろう。

大きいとは言っても、小動物を子供に例えるならハムスケと死の騎士(デス・ナイト)は中高生くらいだろうか。

二人は知るはずもないが、これはシステムアリアドネによる侵入不可能の対策として用意された特殊な入り口による恩恵と言えよう。大きいと入れない。ならば小さくすれば良いのだ。

「高い！　高すぎるでござるよ！」

「オオオァァアアアアアーーー!!」

チェーンの動作音がキリキリとドラゴンを上昇させていく。まるで太陽に手が届きそうなくらい高く、天高く登っていく。

「にょおわああああああああ！　殿ーーー!!!!!」

「オオオァァアアアアアーーー!!」

山頂まで辿り着いたドラゴンは急降下し、そして一回転。伸ばしたバネのような線路をくるくると通過し、とどめの水しぶきだ。

目を回しふらふらと足元のおぼつかないハムスケの手を取り、死の騎士（デス・ナイト）はドラゴンの出口まで誘導していった。

「オオオァァァアアアアアーーー!!」

「ま、待つでござる。しばしの休息を要求するでござるよ……」

左右に揺れる船に乗りたいと指差す死の騎士（デス・ナイト）。未だ地に足の着いていない浮遊感を覚えているハムスケは必至に抵抗している。傍から見ると疲れて歩きたくない犬のよ

うだった。
「びょえええええぇぇぇええ!!　びゅりゃあああぁぁぁあああ!!!」
「オオオァァアアアアアーーー!!」
必至の抵抗も虚しく乗船を許してしまい、瞳を濡らしながら絶叫するハムスケ。対して死の騎士(デス・ナイト)は楽しそうに雄叫びを上げている。
振り子のように揺れる船はだんだんと速度を落としていき、ハムスケにとっては永遠にも等しい、死の騎士(デス・ナイト)にとってはあっと言う間のひと時が過ぎ去った。
「オオオァァアアアアアーーー!!」
「お?　次は建物でござるか。これは絶叫系でなさそうでござる!」
ふんすと鼻息を漏らし、次こそは楽しんで見せると意気込んでみせた。流石に自身とひと回り小さい同族たちが楽しんでいる中、自分だけが死の騎士(デス・ナイト)に愉しまれているのは武士の恥と言うもの。武士と言っても刀を装備できないハムスケであったが。
「へっどほん?　これを耳に着けるでござるか?」
「オオオァァアアアアアアーーー!!」
「おお!　かたじけないでござる」
ハムスケの両手では耳に届かないので死の騎士(デス・ナイト)に〝へっどほん〟を着けてもらった。ハムスケの大きさに合わせて可変し、耳にぴったりフィットちゃんだ。

「だんだん部屋が暗くなってきたでござるよ」
「オオオァァアアアアアアーーー!!」
「も、申し訳ないでござる……」
　口元に人差し指を突き立て、声を抑えるように促した。
　耳元から「クチャ……クチャ……」と何かを貪る音が流れてくる。それも立体音響(バイノーラル)で。
「ア、アンデッドはもう嫌でござるうううう!!」
　アンデッドではなくゾンビだ。そう、この施設はゾンビたちが跳梁跋扈する世界を味わえる絶叫系であった。
　絶叫にも種類があるんだな、と少し賢くなったハムスケ。真横でアンデッドを否定された死の騎士(デス・ナイト)であったが、不幸か幸いか〝へっどほん〟に遮られ耳に入ることなく施設を後にした。
　それからと言うものの、ハムスケと死の騎士(デス・ナイト)は様々なアトラクションを転々としていった。
　周囲は暗くなり、パレードが始まった。虹色に輝く光景に思わず目を奪われ、ハムスケは爪先を光らせ(武技を使い)本能が赴くままに踊っていた。
　パレードも終わり、小動物たちが一匹、また一匹と減っていく。施設も閉まり、あれ

ほど怖かったドラゴンも大人しくなれば寂しさを覚えてしまう。

「もう少し遊んでいたいでござる……」

未だ興奮が鳴り止まないハムスケは、静まりかえった園内を寂しげな表情で見渡していた。

「そう言えばあのお城……まだ入っていないでござる！」

たたた、と後ろから聞こえる咆哮に振り返ること無くハムスケは駆け出していった。

◆

「あーもう、暇じゃ暇じゃ、ひーまーじゃー!!」

「スカートで足をバタバタさせるとパンツが丸見えですよお嬢さま」

「むー、アンダースコートだから恥ずかしくないもん！」

変わらぬ日常に飽き飽きした彼女は、ソファーの上で駄々をこねていた。それはもう子供のように。

最早日課となった光景。ドレスから覗かせる縞模様は流石にどうかと、執事のアイデアでアンダースコートを穿くこととなった。

——システム認証。ＮＰＣ。ゲート展開。

「む？」
「これはこれは……」
　彼女と執事は思わぬ来客に、お城から一望できる園内に視線を向けた。
「でっかいハムスターと……アンデッドか!?」
「霧のアンデッドとは別種のようですな。かつてのご主人様が残された書物に記された種とは違う気もしますが」
　そう、この遊園地を作った創造主は過去の存在。今は残されたＮＰＣたちが施設を楽しんでいる。主を失ってもなお、ＮＰＣたちはこの地に縛られ続けている。帰る場所など何処にも無いのだ。
「爺！　わらわはあのハムスターが欲しいぞ！」
「お嬢さま、あのハムスターはＮＰＣ。然らば帰る場所があるはず。我儘を言ってはいけませんぞ」
「ほーしーいー！　欲しい欲しいほーしーいー!!」
　足をバタバタさせ駄々をこねるに飽き足らず、ソファーに転がり両手もバタバタとさせている。
　太陽のように輝く長髪が乱れるも、お構いなしにバタバタとしている。
「はぁ……仕方ありませんね。では依存させてみますか」

「できるのか!?」
がばっと起き上がり、太陽のように眩しい表情で執事に詰め寄った。
恐ろしいことを言いつつも執事は表情を崩さず、微笑のまま口を開いた。
「この施設は蟻地獄のように出来ており、最後は吸われるようにお城へと誘い出す魔法を掛けられるのです」
「こわっ！　なにそれこわい！」
光あるところに陰りあり。太陽が彼女だとしたら、この施設は陰りそのもの。藻掻けば藻掻くほど、深みに嵌ってしまう。
絶叫系がどうして楽しいか。その理由は意外と知られていない。恐ろしく怖い恐怖から抜け出せた安心感。これが絶叫系の楽しさなのだ。怖ければ怖いほど、終わったときの開放感がたまらないと言う。
「ではパレードが終わった時分に、お城へと招集しましょう」
「今すぐじゃダメなのか?」
「アトラクションがハムスターを吸い寄せてしまいます。終わってからでないと依存性は現れませぬ故」
アルコールやニコチンも同じだが、中毒症状は無くなって初めて現れるもの。目の前にあると何も思わないが、無くなると欲しくなる。失って初めて気づく大切さだ。

「むぅ……それではわらわが眠くなってしまうではないか」
　太陽が沈むのは意外と早い。太陽のように眩しい彼女だが、就寝時間も同じく早いのだ。
　パレードが終わる頃には深い眠りへと潜ってしまう。
「今の内に昼寝をしておきましょう」
「うむ。真っ昼間から惰眠を貪るのも悦なものじゃ！」
　平時であれば、夜が寝られなくなるからと執事に怒られる昼寝が解禁されたのだ。いくら太陽と言えど、数年に一度くらいは日食があっても良いだろう。彼女はご丁寧にパジャマに着替え、ベッドへと飛び込んでいった。

◆

「——お嬢さま……お嬢さま」
　海へと沈んだ意識は、鼓膜が響かせる振動によりゆっくりと浮上していった。
「んっ……うぅ……なんだ、もう朝か？　……むぅ、まだ暗いではないか」
　瞼を擦りながら、ピントが合っていく視界にきょろきょろと見渡す。窓へ視線を向けるも、闇夜が明ける気配はない。

　夜明け前に起こされたことに若干の苛立ちを感じつつ、脳に血液が行き渡るのを待っている。

「件のハムスターを誘うために、早寝したのを忘れたのですか？」

　ぼんやりとした意識のまま、執事の言葉を脳内で反芻させている。声は言葉となり、その意味が現実味を帯びるように伝わっていく。

「……？　あー、うーん？　ああー‼」

　ベッドの中で起こした身体を覚醒させ、慌てて立ち上がりしきりに見回した。

　部屋の中には二人しか居ない。彼女と執事だ。彼女は首を傾げていき、そのままベッドへと倒れ込んだ。

「まだ居ないではないか！」

　再びベッドから立ち上がり、おきあがりこぼしのように倒れては起き上がった。深く考えずに行動する彼女の頭の中にはお花畑が広がっていそうだ。太陽の輝きを身に纏う彼女。きっとひまわり畑が広がっていそうだ。

　ひまわりとハムスターは切っても切れない仲。ひまわりの示す方向にハムスター在り。古事記にもそう書いてある。

「パレードも終わりましたし、そろそろかと」

「なんと！　爺、身嗜みを整えてくれ！　はやく！」

本来ならパレードが始まる時分に起こす手はずであったが、深き眠りから意識を呼び戻すまでに思いの外時間が掛かってしまった。
「はいはい。ではバンザイしてください」
「ばんざーい！」
両手を上げてパジャマを脱ぎ、お城に相応しいお姫さまスタイルに着替え終えた。
やけにあっさりしているが、着替えシーンを文章で表現しても誰も得をしない。得して描写を省いたのだ。絵だけに。
「お嬢さま、お客様をお連れ致しました」
扉のノッカーが叩かれ、廊下から使用人の声が聞こえた。彼女が合図を返すと扉は開かれ、中からひと回り大きなハムスターが軽く走ってきた。
「ううむ、ここには遊具が無いようでござる……」
「初めまして。わたしはこの遊園地を任せられているムハムーシャと申します。あなた……お名前は？」
「某はハムスケでござる！」
ムハムーシャ。それが彼女の名前。由来からしてげっ歯類感が拭えないものの、彼女は列記とした人間類。ハムスター系のケモノだ。
「それよりも！　ここでは遊べないでござるのか？」

　遊び足りなくて来たにも関わらず、いざ入ってみたら居住空間ではないか。これにはハムスケもご不満の様子。
「ゴメンね。残念だけど今日はもう閉園なの。だけど、ハムスケさんがこれからも遊んでくれるのなら、特別に……ね」
「ここに住みたいでござる！　ムハムーシャ殿！」
　瞳をうるうると濡らしながら、ハムスケは上目使いに訴えた。ドツボにはまったハムスケに、内心ほくそ笑みながらもおくびには出さずに笑顔でハムスケの前に行き、瞳を覗き込んだ。
「ふふっ、じゃあ今回だけ特別にお友達のハムスケと一緒に園内で遊ぼうか？」
「本当でござるか!?　かたじけないでござるよ」
　急かすハムスケに手を引かれ、彼女――ムハムーシャは園内へと進んで行った。

◆

「さて……お嬢さまに仇なす不安要素を排除しに行きますか」
　一人残された執事は、短杖（ワンド）を片手に園内を彷徨うアンデッドの元へと向かった。
「《飛行（フライ）》」

彫りの深い執事は天を駆け、件のアンデッドへと直線距離で向かって行く。最短距離で死の騎士（デス・ナイト）の元へと辿り着いた執事は、殺意を込め全力で魔法を叩き込んだ。

「《大治癒（ヒール）》！」

「オオオァァァァァァァァァーーー!!」

不意打ちで回復魔法を撃ち込まれた死の騎士（デス・ナイト）は、攻撃を耐えつつフランベルジュを射抜いた。

空気を切り裂き、その太刀筋は勢いを止めることなく執事の元へと到達する。

「その程度の攻撃、私の執事服（タキシールド）に皺一つ付けることすら叶いませんよ」

埃を落とすように執事服を数度叩（はた）くと、その程度かと言った表情で攻撃を叩き込んだ。ただのタキシードではない。防御力を兼ね備えた執事服（タキシールド）なのだ。

「《魔法三重化火球（トリプレットマジック・ファイヤーボール）》」

逃げ道を塞ぐように三方向に魔法を放ち、確実にダメージを与える。

「オオオァァァァァァァァァーーー!!」

死の騎士（デス・ナイト）が必死にフランベルジュを振り回すも、遠距離どころか中距離攻撃すら持たない死の騎士（デス・ナイト）の攻撃が当たることなく、剣先は虚空を描いている。

◆

「楽しいでござるなあ～！」
「わら……わたしもハムスケと一緒に遊べて嬉しいわ」
コーヒーカップに乗りながら、中央のハンドルを勢い良く回すハムスケ。
「うびゃあ！　め、目が回るでござるーー!!」
「ちょっ、ちょっと、手を離してハムスケ」
慣性でハンドルは今も回り続け、外の景色が早送りしたビデオのように目まぐるしく変化していく。
速度を落とし、カップが動きを止めたのは遊具から流れるメロディーが鳴り止んだ頃だった。
「し、暫しの休息を欲するでござるよ……」
平衡感覚が狂い、三半規管を整えるためにベンチに横たわるハムスケ。
彼女もハムスケの隣に腰掛け、柔らかな表情で背中に手を置いた。
「オオオァァアアアアアアーーー!!」
「むぅ……なんでござるか？」
離れた場所から聞こえる呻き声に、ぴくぴくと耳を動かしたハムスケ。
「ふふっ、もう園内は閉園して、今はわたしとハムスケの二人だけよ。まだ酔ってるの

？」
「そうでござるか？　……それもそうでござるな」
太陽のように眩しい彼女の温もりに、少しだけ目を閉じることにした。
夢見心地の中、ハムスケは影を見た。
「むにゃむにゃ……殿ぉ……」
「殿？　あのアンデッドは……違うようじゃの。うん、ちょんまげも付いていないのじゃ」
寝言の相手を探ろうとするも、死の騎士（デス・ナイト）は殿と言うよりは騎士だろう。思考を潜らせるも情報量が足らず、今は諦めることとした。
「わらわにも、友や仲間と呼べる存在が居れば……こんな風に強制せずとも良かったのであろうな」
彼女には友達が居ない。執事の男性は飽くまでも使用人として彼女に仕えているに過ぎない。園内を利用する小動物やマスコットだってそうだ、そうあれと創生されたに過ぎないのだ。
彼女も、この遊園地の支配人であれと創生された身。造物主の意に背くことも出来ず、この地に縛られ続けている。
「ムハムーシャ殿……泣いているのでござるか？」

目が覚めたハムスケは、そっと彼女の目頭に前足を動かし涙を拭った。
「そんな表情をしていると、某も悲しくなってくるでござるよ」
「ハムスケ……」
精一杯の表情で彼女に笑いかけ、気丈に振る舞っている。
「そうじゃの……わらわは、こんな掛け替えのない笑顔を奪おうとしたのじゃな」
「それがムハムーシャ殿の本心でござるか！　やっと、本音を出してくれたでござるな！」
ハムスケは破顔した。彼女の心を覆いかけたもやもやが晴れるような思いとなり、再び太陽の輝きを取戻した。
「ハムスケ……実は……だな――」
「オオオァァァァァァァァァー!!」
彼女の言葉は最後まで紡がれることなく、それを遮るように咆哮が上げられた。
「オオオァァァァァァァァァーー!!」
「です……死の騎士(デス・ナイト)殿!!」
ベンチから飛び降りたハムスケは、脇芽も振らず一目散に駆け出して行った。
「あーあ……やっぱり、わらわじゃ奴の心を埋めることは叶わなんだ」
寂しくなった思いを振り払い、彼女はハムスケの後を追いかけた。

「ちょ、待つのじゃー！　ハムスケー！」

◆

執事は、魔法を撃ち込めど決定打を与えられないことに苛立ちではなく尊敬を込めていた。

「ふむ……中々やりますな」

本来の死の騎士(デス・ナイト)ではこうはいかなかっただろう。死をも超越した魔導を極めし王によって創生されたアンデッドは伊達ではない、と言うことだ。それを執事が知る由もないが。

「オオオァァァアアアアアァーーー!!」

ここまで耐えてきたが、死の騎士(デス・ナイト)の体力は風前の灯。消え行く魂を振り絞り、精一杯の咆哮を上げた。

「ふむ……まだ叫ぶだけの体力が残っていたとは、これは驚きですな」

「オオオァァァアアアアアアーーー!!」

彼女の……ムハムーシャの近づく気配に思わず気を取られ、攻撃の手を止めてしまった。

「死の騎士（デス・ナイト）殿ーー!!」
「お嬢さま!?　どうしてここに！」
死の騎士（デス・ナイト）に近づくハムスケに構わず、仕えるべき主に向かう執事。
「その……ま、待つのじゃー！　もう良い、止めるのじゃ……」
慣れない運動に息を切らし、肩で呼吸する彼女。
「お嬢さま……もう、よいのですか？」
「わらわが良いと言ってるんじゃ。かの者たちを開放してやってくれ」
吹っ切れた表情で、それでいて優しい表情でハムスケたちを見つめている。
「では……」
パチっと指を鳴らす執事。ガチャリと鍵が開き、遊園地を閉ざしていた扉がゆっくりと開いていく。
「ハムスケよ。お主を待つ者が居るのじゃろ。少しの間じゃが楽しかった。そして申し訳ないことをした。許して欲しい！」
腰を曲げ謝罪する彼女。ハムスケは反応を示さない。
「ど……どうしたのじゃ？」
不安になった彼女はハムスケの元へと近づいていく。
「死の騎士（デス・ナイト）殿が！　……死の騎士（デス・ナイト）殿が目を覚まさないでござる!!」

わんわんと泣きだすハムスケに狼狽し、彼女の太陽に陰りが現れた。
「えっ……あの、爺……ど、どうすればよいのじゃ」
「……。お城の方にポーションは残されています。ですが……その、アンデッドを治癒する物は、ここには……」
ばつの悪い表情で彼女に答えた。それもそのはず、この園内には小動物を始め生き物しか居らず、造物主たちも人間種であったために、アンデッドを回復する必要がなかったのだ。
「ひぐ……うう、こんな時に何でござるか……」
「？」
ひとり言を発するハムスケに首を傾げる二人。
「な、なんと！　本当でござるか!?　本当に治せるでござるのか!!?」
ぱあっと明るくなったハムスケは口から飴玉……基、死の宝珠を取り出し死の騎士(デス・ナイト)の胸へと近づけた。
薄暗い光が死の騎士(デス・ナイト)を包み込み、身体の傷が少しずつ癒えていく。
「……オオオ」
「き、気がついたでござるか!?」
顔をぐしゃぐしゃにしたハムスケは、死の騎士(デス・ナイト)に抱き着き嬉しさのあまり再びわんわ

んと泣きだした。

「オオオァァアアアアアーーー!!」

ハムスケの頭を優しくぽんぽんと撫でる死の騎士（デス・ナイト）。

「わらわが……わらわが二人を引き離そうと考えたことが、間違いだったのじゃな」

「お嬢さま……」

そこからは口に出さずに、執事はそっと見守っている。

「某は……某は帰らねばならないでござる！」

脳裏に骨身の主人を思い浮かべ、ハムスケは主が恋しくなってきた。

「殿ーー!!　某は永遠に殿に仕えるでござるよーー!!」

「オオオァァァアアアアアーーー!!」

死の騎士（デス・ナイト）を背に乗せ、出口まで駆け出して行った。

「これで……よかったのじゃな」

「私とお嬢さまと同じく、彼らにも引き離せない絆を持っていたのですね」

少しだけ頬を染める彼女。しかし、永久にも等しい時を行き、その中で見つけた光。

仕方がないとは言え、手元から離れていくハムスケの背をを寂しそうに見つめていた。

出口まで辿り着いたハムスケは振り返り、落ち込んだ表情の彼女へ向かった。

「ムハムーシャ殿！　今まで楽しかったでござる！」

彼女はハムスケをじっと見据えた。しかし言葉が出てこない。
「また遊びに来ても良いでござるか!!」
「オオオァァァアアアアーーー!!」
ハムスケに続き死の騎士（デス・ナイト）も、また遊園地で遊びたいと咆哮を上げた。死の騎士（デス・ナイト）の方は彼女とではなく、純粋に遊園地のことを指しているのだが、野暮なことは言わないでおこう。地の文は彼らには伝わらないのだ。
「当然じゃ！　わらわが住まう遊園地がつまらない筈がない。また来るのを楽しみに待っておるぞ！」
再び明るさを取り戻した彼女は、ハムスケに精一杯の笑顔で答えた。
「今度は……その、ハムスケの友達と一緒に来てくれるか？」
「うむ！　殿もきっとよろこんでくれるでござるよ！」
ぶんぶんと手を振るハムスケに答えるように、彼女も恥ずかしながら別れの……いや、また遊びに来るための挨拶をした。

◆

「ハムスケが着ていた鎧が見つかっただと？」

カッツェ平野を捜索していた部下からの報告を受けたアインズは、どうすべきか思考した。
（うーむ……ただ迷っただけとは考え難い。しかし高レベルの配下の目を掻い潜って連れ出すのも困難を極める……）
「アウラとマーレを呼んでくれ。カッツェ平野へ向かうぞ」
（大勢で行くと敵が居たときに怪しまれる。ここは少数精鋭で調査するべきだよなあ）
暫く待機すると、ドアからアウラとマーレが入ってきた。
「アウラ・ベラ・フィオーラ、御身の前に」
「マーレ・ベロ・フィオーレ、御身の前に」
文字数稼ぎではない。挨拶は大事。古事記にもそう書いてある。
「うむ、二人とも忙しい中よく来たな」
「忙しいだなんてとんでもありません！　アインズ・ウール・ゴウン様の命こそ全て！　何よりも優先されるのです」
うんうんと頷くマーレ。と言うかナザリックに住む全てのＮＰＣが共通して思っていることだろう。
「それでアインズ様……要件と言うのは？」
「うむ、カッツェ平野に向かったハムスケ、並びに死の騎士（デス・ナイト）が行方不明となったのだ。部

下からの報告でハムスケが着ていた防具だけが発見され、今から詳細を調べに行きたいのだ」

　驚いた姉とは打って変わって、弟のマーレは心底どうでも良い表情をしていた。

「えーー!!　あのハムスケは私も気に入っていたんですよ！　それを拐うなんて許せない!!」

「落ち着くのだアウラ。まだ誘拐とは決まっていない。それに誘拐だとして、威圧的に出ればハムスケや死の騎士（デス・ナイト）に危険が及ばないとは限らない」

「そうでした……申し訳ございません」

　お気に入りのハムスケに何かあれば事だ。状況が不明確な以上、下手な行動は慎むべきだろう。

「伝言（メッセージ）　うむ、今から転移するが問題はないか？　ああ、分かった。今から転移しよう」

　転移先は見晴らしの良いカッツェ平野。敵からの奇襲に備えたアインズは再び魔法を唱えた。

「転移門（ゲート）」

　アウラ、マーレと入り、最後にアインズが入った。いくら部下が安全を確認したとは言え、念には念を入れるべき。守護者の二人が先に入り、問題がないことが確認された段階でアインズが入るのだ。

◆

「お待ちして居りました。御方よ」
跪く部下に片手で挨拶をした。
「うーん、私の索敵スキルでも見渡せませんねー」
「ここはアンデッドの気配を孕む霧が支配する土地。なんらかの対策がされているのだろう」
それが何かは分からないが、確かに強者が身を潜めるにはもってこいの場所だ。
「二人は厳重警戒し、アウラは死の騎士(デス・ナイト)かそれ以上の反応があれば教えてくれ」
「畏まりました！　アインズ様！」
「あ、あのう……ぼくは何をしたら良いんですか？」
これまで碌な台詞すら無かったマーレが、ここに来てようやく口を開いたのだ。かわいい。
「うむ、マーレは敵に囲まれたときの為に備えてくれ。だがハムスケと死の騎士(デス・ナイト)の無事が何よりの最優先だ。攻撃は避け、防御を優先するように」
「か、畏まりました。アインズ様」

どういうわけか照れたような表情で頷いたマーレ。かわいい。
「この近くがハムスケの防具が落ちていた場所だ。警戒を緩めるなよ」
「はい！」
「か、畏まりました！」
霧の向こうから何かの足音が聞こえてくる。土を蹴る音から走っていることが伺えた。
「マーレ！」
「は、はい！」
アインズの前に立ち、守るように構えを取った。
「と、殿ーーー!!!!」
「ハ、ハムスケ!?」
真っ先に気づいたアウラが声を発し、そのままアインズの元へと抱き付いていった。
押し倒されるようにハムスケに戯れられる様子は、さながら元気いっぱいの大型犬と飼い主と言ったところだろう。
「ハムスケ、お前今まで何処に――」
「寂しかったでござるよ！　会いたかったでござるよ殿ー!!」

ハムスケの顔が見れてホッとしたアインズ。

「オオオァァァァァァァァァー！！」

ハムスケに遅れて来た死の騎士（デス・ナイト）は、何度目かの咆哮を上げた。

「ははは、一件落着ってことか！」

全ての案件を明日の自分に棚上げし、ハムスケの長いようで短い冒険は幕を下ろしたのであった。

◆

「今日はとーっても楽しかったでござる！　明日はもーっと楽しくなるでござる。ね、死の騎士（デス・ナイト）！」

「オオオァァァァァァァァァー！！」